第２３７号

ねじりはちまき

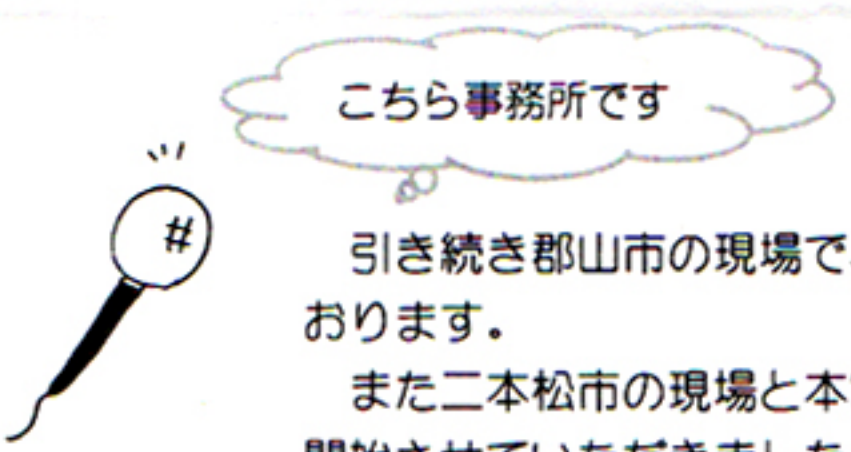
６月　芒種　夏至の月になりました。
６月１日、衣替え。６日、芒種。１１日、梅雨入りです。１６日、父の日。
２２日、夏至となっております。

夏至とは２４節気の１つで、太陽が黄経９０度（夏至点）を通過した瞬間または、その日から小暑までの期間を夏至といいます。昼間が１年中で最も長い日で、冬至より４時間５０分も長くなります。
夏を予感させる時期とはいえ、梅雨のまっただ中であり、厚い雨雲が空をうばう日が多い為、日照時間は冬より短くなります。
天文学上では、春分から夏至までを春としています。

今年も早、半分が過ぎようとしています。
変わりゆく野山の景色に時の早さを感じるこの頃ですが、梅雨寒には十分にご留意下さい。そして網戸の手入れ、納戸などの風通しなども。

幸田　常一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



引き続き郡山市の現場で、住宅新築工事をお世話になっております。
また二本松市の現場と本宮市の現場でも、住宅新築工事を開始させていただきました。

夢を見続ける男　NO６２

植物学の父・牧野富太郎のこと

今回は植物学者の牧野富太郎のことを取り上げたい。「私は植物の精である」・「雑草という名の植物はない」と牧野は言ったそうだが、牧野のような植物に深く心を寄せる存在があって初めて今の植物学がある。小生も自然の大切さを感じながらも、名を始め個々の植物のことをどれほど知っているかとなると、誠に心細い。名を知りたいと思っても、すぐ調べることなく放置してしまっている。では、牧野という人はどうして人生 94年のうち70 年以上に亘って植物分類・標本づくりなどの研究に専念できたのだろうか。牧野が１９40 年（昭和 15 年)、78 歳で刊行に漕ぎ着けた「牧野日本植物図鑑」は今も現役で、その道の専門家には必読の書である。そのような研究の道を歩んだ牧野の足跡を、ほんの一端にすぎないが、辿ってみたいと思う。どうかお付き合い願いたい。

先ず、牧野の研究生活ぶりから。牧野は植物の分類研究と標本づくりのために内外の関係文献を集めたり、全国各地の植物標本を収集するために奔走するなど、多額の費用を費やした。収入が乏しい身にもかかわらずである。当然借金漬けとなる。牧野の金銭感覚は疑問符が付く方だったらしい。研究のためにと没頭し、その他のことは眼中に入らなかったようだ。文献購入や標本集めのための借金は今でいうと数千万円の規模に昇り、家賃が払えずに引っ越しも 30 回以上に及んだという。こういう中で牧野の妻壽衛（すえ）の苦労は並大抵ではなかった。この妻の 40 年近くに及ぶ、涙ぐましい支えがあって牧野の研究生活は可能であった。牧野本人もそのことを自叙伝で述懐している。苦労をかけた妻壽衛のために牧野は、1927 年(昭和 2 年)に仙台で発見した新種の笹に、「スエコザサ」と命名したのであった。その翌年病に伏していた壽衛はこの世を去った。牧野が 66 歳（その時東京帝国大学理科大学講師)、壽衛が５４歳の時である。その時牧野は亡き妻にこう句を詠んで贈った。「世の中の　あらん限りや　スエコザサ」と。妻への深い思いが読み取れる。

それでは、牧野が植物に関心を寄せるようになった歩みを見てみよう。関心を持ち始めたのは 10 歳代半ばのようだ。牧野が生を受けたのは、高知県高岡郡佐川町。勿論自然豊なところだ。牧野は新学制で誕生した佐川小学校に入学したものの、その小学校を 2 年で自主退学（14 歳）してしまう。その理由は学校の授業に飽きたからだという（小学校入学前に、寺子屋や郷校・名教館に通い、勉学していた)。だが、牧野がその小学校で唯一興味を抱いたものがある。それは文部省掛図の「植物図」だった。既に植物に対する関心の芽生えがあったのが窺える。この説は高知県牧野植物園に記されている。別の説では、牧野は造り酒屋の跡継ぎだったので、余り学業を修める必要がなかったからだともいう。いずれにしても、退学後牧野は関心のある植物採集・写生・観察をして時を過ごせる身であったようだ（酒屋の方は祖母や番頭に任せて)。これは、15 歳で佐川小学校の臨時教員(2 年間)になっても続く。実は、この臨時教員時代に牧野にとって転機が訪れる。高知師範学校の教師永沼小一郎との出会いである。牧野は永沼を通して欧米の植物学に触れることができた。牧野は自叙伝で「私の植物学の知識は永沼先生に負うところが大きい」と述べている。さらに、17 歳のころもう一つの出会いがある。江戸時代の本草学者小野蘭山の「本草綱目啓蒙」と出会う。本草学は医薬の学問だが、その中の薬草即ち植物学について魅かれ、傾倒していく。これら二つの出会いを経て、さらに独学する中で、いつしか牧野は日本中の植物を一冊の書籍にまとめ上げる夢を抱き、しかもそれは自分にしかできない仕事だと確信するようになるのだ。そこで研究心が固まった牧野は、一生の仕事として酒屋より植物学を選び、いよいよ上京することになる。２２歳のときである。

牧野の舞台は東京に変わる。先ず牧野は東京帝国大学理学部の植物学教室の門を叩く。通い詰めて、やがて文献・資料の自由使用が認められるようになる。そして 25 歳の時、同教室の研究メンバーと共同で「植物学雑誌」の創刊に漕ぎ着ける。これは現在でも日本植物学会において継続しており、日本で最も古い歴史をもつ権威あるものである。

牧野の精力的な活動は続く。26歳の時、かねてより構想していた「日本植物志図篇」を自費で発刊する挙に出た。今でいう「植物図鑑」のはしりである。明治２１年頃の印刷技術である、印刷に用いる植物の絵（標本図）は自分で描いた。その絵は当時音信のあったロシアの植物学者・マキシモビィッチから高く評価されたという。翌年・27歳の時、新種の植物を発見して「ヤマトグサ」と命名、さらに28歳の時には、世界的に点々と隔離分布する「ムジナモ」（水草の一種）の日本での新発見と次々に業績を上げる。しかし、その牧野に失意の時が訪れる。同年、東京帝国大学の植物学教室の出入りを禁じられてしまう。理由は不明。それで、先に刊行した「日本植物志図篇」も6巻で中断せざるを得なくなる。

牧野は一旦高知に帰郷するが、その才能を惜しむ声あり、３２歳の時（明治26年）東京帝国大学理科大学の助手として呼び戻される。再び本格的研究生活を送ることになる。38歳の時、未完の「日本植物志図篇」に代わり、「大日本植物誌」を自費でなく、東京帝国大学の費用捻出で発刊できることになった。しかし、これも4巻までで中断に追い込まれる。どういう理由なのか、主任教授の妨害があってそうなったという。誠に残念なことである。それでも牧野の研究熱は衰えず、益々植物標本の収集に奔走する。しかし、奔走するにしても限界がある。そこで、牧野は全国の植物収集愛好家や研究者に標本を送ってくれるよう依頼の便りを書きまくる。それが功を奏して、牧野が収集した標本16万点のうち半分くらいは全国の協力者から送られたものだという。これは牧野が全国を奔走する中で、多くの人との出会いの中で培った信頼がいかに厚かったかを物語るものであろう。

牧野への信頼といえば、東京帝国大学での47年に及ぶ在籍期間である。前に助手になったことは触れたが、20年間助手を勤め、50歳の時（大正元年）に講師となり、退官する77歳まで（昭和14年）講師を勤め挙げたのである。牧野は学歴も無く、権威なるものへの理解もなかったが故に、学内から何度も理不尽な圧力があった。しかし結局は、牧野は東京帝国大学に必要な人材とされ、永く在籍して研究することを認められたのであった。

牧野は東京帝国大学を退官した翌年、牧野の研究成果の総決算としての「牧野日本植物図鑑」を刊行する。３千種の植物が納められている（後の増補版では3900種）。この中には植物の名の由来も添えられている。例えば桜の「ソメイヨシノ」。これは、江戸・染井の吉野という植木屋から広まったのでそのように命名されたということなど。ところで牧野が命名した植物はどのくらいあるのか。命名した数は２５００種以上といわれる（新種：1000種・新変種：1500種）。自らの新種発見も６００種余りになるということだ。“植物は実地研究が一番大事だ”と心してコツコツ現地に足を運んだ成果であった。牧野は生涯酒も煙草もやらなかった。そういう人でなければやれないことだったかも知れない。

牧野に関するエピソードをひとつ。尾瀬でのこと。尾瀬で植物を収集した際、余りに植物を採ったため、尾瀬の保護運動の第一人者であった平野長蔵が「研究するだけでなく、保護を考えろ」と牧野を叱ったというのである。植物採集に熱中し過ぎたのであろう。

最後に牧野の心境を表わす歌を。「朝夕に　草木を我が友とせば　心寂しき折節もなし」

バイオマス発電　飯館電力とエコロム(東京)　イネ科の飼料用作物：ソルガム
（メタンガス））
＊二ホンジカ食害対策にも有効

会津若松の里山・奴田山（青木山）

【今回登った山の概要】

・奴田山（ぬたやま、723m、会津百名山、会津若松市）地元では青木山（あおきやま）と呼ばれている。

・国道 49 号を河東から会津若松に入っていくと南東側、背あぶり山の右手奥に存在感のある山が見える。

・青木山の西側山麓は扇状地になっていて、青木地区・御山(おやま)地区は会津身知らず柿の産地で、御山からは毎年皇室に献上されている。

・青木山は、20 年位前に登ったことがあり、若松市街地からすぐ近い里山なのに、あまり人が入らず奥深い山との印象が残っている。

・登り口はいくつかあるが、以前と同じ小田山山頂（372m）を経由する。

・5 月 19 日に“青木山を守る会”が主催したヒメシャガ鑑賞会が行われたと地元紙に載っていて、1 週間後くらいが見頃とのこと。

5 月 31 日（金）

自宅 5：40 発、6：40、小田山山麓の小田山公園入口に着く。ゲートの手前に 5～6 台の駐車スペースがあり、「熊　出没中！」の看板が立っている。

鈴を着け、7 時スタート。未舗装の車道を、山を回り込むように登ると会津若松の街並みが見えてくる。軽装の熟年男性が下りてきて挨拶を交わす。小田山経由で青木山まで行くと言うと「クマにご注意を！」とのこと。

歩いて 10 分ぐらいの中腹に戊辰戦争「西軍砲陣跡」がある。確かに眼下に赤瓦に吹き替えられた鶴ヶ城が見える。距離は 1.6ｋｍとのこと、佐賀鍋島藩のアームストロング砲の射程距離が 2ｋｍというからたまらない。良く籠城して 1 ヶ月も持ったものだ。

小田山には古墳時代の遺跡もあり、鎌倉時代から安土桃山時代までの 400 年間にわたった葦名氏の居城・山城で史跡が多く、たくさんの「案内板」が設置してあり、読んでいると往時が偲ばれて楽しいが、今回は青木山に登ることが目的なので、先を急ぐ。途中磐梯山が見えるところがあり、薄曇りの中に穏やかに鎮座している。

車道の終わりの所に、会津藩家老丹羽能教（＊）と会津藩大老田中玄宰（＊）の墓がある。

（＊）丹羽能教（にわよしのり、1766～1843）：田中玄宰の藩政改革による番頭組頭を経て軍事奉行となり、北方警備（樺太出兵）や江戸湾（相州）警備に従事。その後若年寄、家老となる。内政にも功労あり、最終石高 1000 石。（福島県：歴史・観光・見所（ホーム））

（＊）田中玄宰（たなかはるなか、1748～1808）：天明（1781～1789）の大飢饉の時の家老、後大老。会津藩「寛政の改革」の推進者。大飢饉を乗り切るため財政、産業、軍制、教育など藩政の全てにおいて改革を断行。養蚕、薬用人参、紅花、藍、綿、漆器、酒造り、絵ろうそくなどの栽培や製造を推奨し実行した。今日の会津地方の伝統産業の基礎が築かれた。
藩校日新館の創設なども行ない会津藩が天下の雄藩となる基礎を築いた。1600名の藩士が北方警備の任についている最中に亡くなる。「我が身は鶴ヶ城と日新館の見える所に埋めよ」との遺言により小田山の山頂に埋葬された。（会津若松観光ナビ、ウィキペディア）

玄宰の墓の裏側に遊歩道の看板があり、いよいよ樹林の生い茂る山道になる。最初は平坦な尾根道を南進する。右側の「大窪山墓地入口→」と左側の「←子供の森」の標識を過ぎると「物見櫓跡」に着く。ここが小田山の山頂で北北西方向に若松市街地が見え、その先に残雪も少なくなった飯豊連峰が霞んでいる。

尾根道は良く踏み込まれていて快適だ。交錯する林道に出合い左に10m程行くと「ヒメシャガ群生地」の看板があった。再び登山道に復し緩やかに登って行くと、ところどころに終わりかけたヒメシャガ（＊）が残っていた。可憐な花は直径 3～4ｃｍ位の淡い紫色。葉は淡緑色で剣型。茎の長さは 20～30ｃｍ位か。

（＊）ヒメシャガ：アヤメ科アヤメ属の多年草。環境省レッドリスト準絶滅危惧（ＮＴ）。郡山市は伝説のハナカツミがヒメシャガであるとして市の花に指定している。郡山市日和田町の安積山公園に植栽。（ウィキペディア）
古今和歌集“みちのくの あさかのぬまの 花かつみ かつ見る人に こひやわたらむ”（巻第14恋歌4・677　読人不知）（ウィキペディア）

来年は1週間ぐらい早く来てみようと思った。

さらに進むと右手に直径30ｃｍを越える杉の林があり、自然林である周囲の広葉樹の林相と異なり、明らかに人の手で掘削し平にならしたところに植林したと思われる。そのためその縁（ふち）を通る登山道は急坂になっている。

林道から20分くらいで左側の麓山神社からの道と合流する。平坦で少し広く、休めるような枯れ木があったが薄暗いので「青木山→」の標識に従い右に曲がり先に進む。右手の樹林の間に高さ15m以上の大きな藤の木があり、房状の薄紫の花が咲いていて登山道にも沢山落ちていた。また狭い道の真ん中にドンブリメシをひっくり返したような真っ黒い動物の糞があった。踏まなかったから良かったがいかにもクマの糞という感じだった。

さらに進むと樹林が切れているところがあり、若松市街地や磐梯山が見渡せた。飯豊山は霞んでいる。反対側には背あぶり山の尾根上に5～6基の風力発電

の白いプロペラ（風車）が割と近くに見えた。

再び樹林の中に入るとすぐに山頂に着く、8：57。約2時間の道のりだった。広葉樹林に覆われた三等三角点のある山頂は葉が繁り見晴らしはない。葉が落ちた晩秋や冬場なら見通しが良いかも知れない。山頂の標柱はクマにでも荒らされたのか、後ろ側が削られたようになっていて今にも倒れそうである。

風もなく快適な歩きでほとんど休憩はしなかったので自然木を組んだベンチ（？）に腰を下ろし春セミの合唱を聞きながらパンとバナナを食べ、40分ほど休憩する。

9:40 下山開始。諏訪神社を目指す。小田山コースとの出合まで戻り直進する。道は良く踏まれて藪漕ぎはない。出発から40分、標識のない三差路を東に少し登ると背の高い広葉樹林の中に杉と赤松に囲まれた小さな社（やしろ）があった。模擬石様の石積みの上に、観音開きの扉に鍵のついた木造の社が載っていて、比較的新しく、すぐ隣には掃除用具の入ったヨド物置があった。

社の前の古い石碑の一つに「八日供養塔　現世安穏　天保十三　八月吉祥日」と彫られていた。お参りをして社からまっすぐに伸びる参道を下る。

途中ジグザグの急坂を下ると高さ3mくらいの丸太の朱の鳥居があり、さらに下ると分岐に達し、振り返ると「←麓山神社」と「青木山→」の標識があった。

子供の森への登山道を下ると、畑のある「青木山登山口」に11時着。ジャガイモ畑は四本の紐（「触らないこと」の注意書）で囲まれていた。

「子供の森」は旧学校スキー場を活用した広場や池、キャンプ場となっていて管理棟もある。車を置いた所まで車道を歩くのは嫌なので、旧ゲレンデ斜面の遊歩道を登り返して小田山の尾根道を目指す。20分ほどで朝通過した尾根道に至り、小田山の車道を下り始めた。左側に「大窪山墓地入口」（＊）の標識があったので、降りてみることにした。

江戸時代初期に山の斜面を切って整備された墓地は一家毎に段々畑のようになっていて、倒れたままのものや藪に覆われている石碑が多い。「墓石の墓場」といった印象で痛ましい。

（＊）大窪山墓地：初代藩主保科正之の時代に創始された中・下級藩士の共同墓地。戊辰の役後の武士団の崩壊により、全国に四散し会津と疎遠になった人が多く、墓碑の倒壊・埋没が目立つ。基数約4000という藩政墓地は全国的にも珍しい。（会津若松市教育委員会　説明板）

北青木の県営団地を11：40に通過し、少しでも近道をしようとお寺の境内を抜けようとした。善龍寺（＊）というお寺だった。

どのように行けば公園入口に至る車道に復帰できるか、寺の案内板を眺めな

がらウロチョロしていたら、虫除けの網を被って畑仕事をしていた70代前半の男の人が声をかけてくれた。

彼は「奈与竹（なよたけ）の碑」や西郷頼母（さいごうたのも）夫妻の墓、西郷邸で自決した「二十一人の墓」を案内してくれて、公式な説明には書けないようなエピソードも語ってくれた。

（＊）善龍寺（ぜんりゅうじ）：会津藩主・保科正之の会津入部とともに建立され、保科家の元祖筑前の守正則の霊を守る保科家の菩提所として発展してきた寺。家老西郷頼母の妻千恵子の“なよたけの 風にまかする 身ながらも たわまぬ節は ありとこそきけ”戊辰戦争で花と散った会津婦道の精神を示すこの有名な辞世を昭和3年（戊辰の年）“なよたけの碑”として善龍寺に建立された。碑陰には戊辰戦争で散った233名の会津藩の婦人名が刻まれている。毎年5月1日に奈与竹墓前祭が行われる。

（会津若松観光ナビ）

また、会津九家と称された藩内の名門井深家のことも話してくれた。ソニーの創始者の一人井深大（いぶかまさる、1908～1997）の祖父は、井深基という会津藩士で、戊辰戦争の時は18才、正規軍主力部隊の朱雀隊に属していた。大の父は大が 2 才の時亡くなったので当時愛知にいた祖父の基に引き取られたこと、大が生前お寺の建物を修理する際に500万円を寄付したことなどを話してくれた。家老職を務めた井深家の墓石は高さ3m程の笠を被ったもので5～6以上あった。しかし墓石のほとんどが倒れ重なり、かなりの部分が草に覆われていた。

さらに彼が強調していたのは、白虎隊の生存者飯沼貞吉の弟の子に若松市生まれの飯沼一省（かずみ）（1892～1982）という人がいて、東京帝大法学部卒で内務次官にまで上り詰め貴族院議員も務め、戦前から戦後にかけて日本の都市計画行政を牽引した人物とのこと。会津の人や福島県民はもっと知っておくべきだと熱く話していた。

話は尽きなかったがお腹が空いてきたので、御礼を申しあげ、改めて車道に復帰する径（みち）を尋ねてお別れした。最後にＦさんと名乗ってくれた。一時間弱の貴重な歴史講義だった。全く偶然の出合いで、素晴らしい案内者に巡り会えてありがたかった。

途中で径が不分明になり10分くらい登りの藪漕ぎをして車道に復することができた。小田山公園入口の車に着いたときには午後1時を過ぎていた。

山登りよりも歴史探訪の旅となった今回の山旅を無事終える。会津若松発祥の幸楽苑でラーメンを食べて、帰宅する。

令和元年６月　ＮＯ８０　　アンチ・エイジング　山旅遊人

＜会社近況＞

６月に入りました。いよいよ梅雨入りですね。肌寒い日が続いておりますので、体調管理には十分に気を付けて下さい。

さてこの度弊社取締役会におきまして、下記の通り役員改選が行われそれぞれ就任いたしました。
就きましては、今後共社業充実をはかりお客様のご要望に添うよう、一層の努力をいたす所存でございますので、なにとぞ倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

取締役会長	幸　田　一　二
代表取締役	渡　邊　正　勝
専務取締役	鈴　木　信　義
設計部総括	佐　藤　美　穂
大工部総括	渡　邊　正　吾
土木部総括	國　分　　務

・・・